大学院同窓会からのお知らせ

JUEN 08
Joetsu University of Education, Network

上越会

上越教育大学大学院同窓会
宮城県立光明養護学校長　遠藤　雄三
（障害児教育四期生）

宮城県の同窓で作る上越会は、今年、第十一回を数えました。この会は平成八年に、当初第十一期生の生徒指導志賀野博さんや第十二期生の教育経営高橋鋼さんなどが中心になって十一期と十二期の会として結成したものです。さらに修了生名簿から宮城県出身者を拾い出して全員に案内をし「上越会」としての基礎が築かれました。

上越では宮城県人会が若井彌一先生らの援助もあって盛んだったことや、歴代の学長や副学長、同窓会担当の先生方が、宮城までお出でくださり、会員を励ましていただいたことも今日の会の活動につながっていると思われます。

さらに元学長で盛岡市にお住まいの盛岡市教育委員会教育長加藤章先生には、上越会に毎年ご参加いただいています。先生のお勧めもあって、飲み会だけでなく、研修も行うという今日の形ができました。

今年も、会は二部構成でした。一部では加藤章先生と副学長戸北凱惟先生にご講話いただきました。加藤先生は、最近の新聞記事等を引用しながら、十年間日韓歴史教科書研究を共同で行い教科書を作成したご経験を基に、歴史的事実の解釈はどんな未来を展望するかによって変わりうること、感性の交流は早く、それを知性に切り替えるのがこれからの歴史教育であると、示唆に富んだお話をされました。戸北副学長には、近年の国立大学を巡る厳しい状況に触れ、その上で上越教育大学の使命などを中心に、現在行っている研究、教育、地域連携、管理運営の各活動とその方向性を具体的な例を挙げながら熱くお話しいただきました。

二部は近況報告を兼ねた情報交換会ですが、その中で会員の勤務する校舎一体型小中一貫校の登米市立豊里小中学校について紹介があり、質問が活発に行われました。これまでの会では実践紹介などもあり、情報交換と合わせて、校種を超えた交流を深めています。どこでも地方財政が厳しさを増していますが、宮城県もその例に漏れず、現職教員は地元大学院へ限定して派遣するようになりました。現在、会員は、百一人ですが、今後とも各方面で活躍する修了生の間をつないでいきたいと考えています。

右から２人目加藤章盛岡市教育委員会教育長、戸北凱惟副学長

大学院同窓会への問い合わせ先
大学院同窓会事務局長
中村　雅彦
（自然系教育講座理科分野　教授）
E-mail:masahiko@juen.ac.jp

宮城県支部「上越会」の会長は、八月に開催されました会で第十一期（生徒指導）志賀野博様が新会長に選出されました。

修了生からのお便り

学校現場に入って
～子どもたちを取り巻く環境の実際から、授業の意義を考える～

プロフィール
庵地　優里花（あんち・ゆりか）
鹿児島県熊毛郡屋久島町立永田中学校教諭　（音楽科）
平成１８年３月　上越教育大学大学院学校教育研究科教科・領域教育専攻芸術系（音楽）コース修了
最近のお気に入りな曲はアラブ・ポップス♪

授業風景

修了して一年半が経ちました。今回は修了後、自分にとって初となる学校現場の模様をご紹介します。

世界自然遺産の島屋久島にて

四月から私は屋久島の中学校に勤務しています。生徒は素直で礼儀正しく、校舎を小学校と中学校とで二分している小規模校（全校生徒数小学校24名　中学校15名）というのもあって、ごく自然に上の年代の子どもが下の年代の子どもに教え伝えるという良き伝統が育まれています。反面ほぼ固定化された人間関係から、幼少時より自身の能力や役割があらかた決められてしまっていて、なかなか自身の限界や殻を破りにくいように感じられます。また競争意識の希薄という問題も抱えています。

生徒の感想から

「やっぱり音楽は楽しいものだと実感」選択授業後の生徒の感想です。この一言に嬉しさを覚えると同時に、気が引き締まる思いにもなりました。本校の生徒は総合的な学習の時間で郷土芸能を学んでいることから郷土の音楽に対しての抵抗は全く見られておらず、また町の音楽会や育成会など行事を通して郷土の民謡を歌っているという背景からも郷土の民謡を身近に感じており、伝統を守り大切にしていきたいという思いがしっかりと受け継がれていると感じられます。一方、ホール等施設の不足や地理的側面からも音楽家を招聘し演奏会を開くなどの機会はごく限られており、音楽の授業の文化的意義は重要と考えられます。何をどのように提供していくのか、吟味していく責任があると思います。生徒一人一人が音楽性を追求し楽しさを実感できる指導の研究と併せて自らの課題とし、取り組んでいきたいと考えています。

屋久島エレジー練習風景

上教大で学ぶ皆さんへ

私を育ててくれた場所、院生室では現職・ストレートマスター・ゼミの括りを超えて毎日のように、真剣且つ楽しく課題等に関する示唆に富む語らいがなされていました。院での二年間を色濃くしてくれるものは何と言っても「人」という財産だと思います。仲間や先生方、実践を進めていく上でつながった人との輪を大切に、様々な経験を積んで実りある充実した研究を修めてください。